
宣戦

ゆき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宣戦

【Nコード】

N0067K

【作者名】

ゆき

【あらすじ】

江戸の町のどこかに、500箇所ある貴族によって、爆弾を仕掛けられた。

銀時達は無事、住民を助けることが出来るのか？

夏の猛暑。（前書き）

今回は、江戸町がピンチになり、それを銀時達が助けるお話です。たまに沖神が出てきます^^

夏の猛暑。

「みーんみんな．．．」

猛暑が続く、暑い暑い夏。

蝉達が暑さを紛らわせるかのように、鳴き続けている。

「．．．神楽あ．．。いちご牛乳買って来てくんねえ？ 酢昆布代やるから。」

「あー、神楽ちゃん。ついでに僕のアイスも．．。」

「．．．しょうがないネ。何箱で手エ打つアルか？」

「俺、20箱。」

「僕は30箱で。」

「．．．足りないアル。かわい少女にこの暑い中歩かせるなら、せいぜい

100箱はいるヨ。」

万事屋3人は、暑さに耐えきれず限界を越していた。

特に、神楽はいつもは反論するクセに今日はその気力もない。頭がおかしくなったのか、しぶしぶ2人のおつかいを受けた。

「．．．しゃあねえ。いちご牛乳のためだ。」

「そうですね。じゃあ、僕50箱出します．．。」

「俺も50箱な。よろしく．．。」

「．．．んじゃ、行って来るアル．．。」

「はいよ。気イ付けてな。」

「いつてらっしゃい。」

「ガラガラガラ」

「・・・あつちイ・・・。」

なんとなく呟いた一言が神楽をより暑く感じさせた。

町のアスファルトは今にも溶けそうなくらい、熱くなっている。

団子屋、雑貨屋・・・それぞれの店が少しでも涼しくしようと、水をばらまいていた。

そんな中、神楽は愛犬、定春にのってゆっくりゆっくり目的地に向かっていった。

あー。やっぱり引き受けるんじゃないかったアル。

夜兎にはきついネ・・・。この日光・・・。

「ちゃらららららん」

「いらっしやいませえ」

コンビニの自動ドアの音と同時に、すうと冷たい風が流れてくる。

「・・・っ、いちご牛乳、アイス・・・酢昆布・・・。ついでに銀ちゃんのジャンプと新八の雑誌、

あと私の月刊雑誌。このくらいアルな・・・。」

「またお越しく下さい。」

神楽は会計を済ませると急いでコンビニを後にする。

コンビニを出た時には、今日の気温がMaxまで達していた。

神楽の額からゆっくりと汗が流れおちる。

あつっ．．．。

今日何度だったけ？

あー、もう。とろけ死ぬアル。絶対、熱中症になるネ。

こんな中、傘なしで夜兎が歩いてたら完全に死ぬアル。

だいたい、ここは平均気温が高すぎるネ！

．．．ふんっ！！．．．．．

「．．．それにしても、暑いアルな．．．。」

「．．．それにしても暑いでさア．．．。」

「あ。」

「あ。」

最悪．．．。

こんな暑苦しい中、こんな暑苦しい奴が出て来て、もっと暑苦しくなったアル。

まった、決闘を申し込みに来たアルか？

やってらんないネ．．．。

私の目の前には、金髪に近い茶色の髪に、ベビーフェイスで相変わらず暑苦しそうな格好をした奴がいた。

「みーんみんな．．．」

気温はMaxを越していた。

町の人達も暑さに耐えきれず、家に帰っていく。

「バサッ　バサッ　」

蝉も限界がきたのだろうか。
それとも、何かを警告しているのだろうか。
次々と死骸になって地面に落ちていく。
何かを知らせるかのように。

「新八！。テレビつけてー。」

「．．．あー。はいはい。今行きますう．．．。ニュースステーションで良いですね。」

「ピッ」

「だめ。結野アナが出てる、午前二ユース。」

「ピッ」

「文句言つなら、最初から自分でつけてくださいよ！」

「何？！万事屋銀さんに向かってそれはないんじゃない？新八くん。」

「何いってんですか。家賃もろくに払わない人が．．．。大体ね．．．。」

「あー、はいはい。分かりました。」

「ちよっと、人の話聞いてんの？！」

「あ、結野アナ出た！」

画面にアナウンサーの顔がアップで映し出される。

しかし、天気予報を始めようとしたら画面は切り替わり、
若々しいアナウンサーから、中年のアナウンサーに変わった。

「．．．ただ今、緊急ニュースが入りました。天気予報を中止し緊急ニュースを流します。」

「はあ？緊急ニュース？どうせ、くだらないニュースなんだろう？それより、結野アナは？！」

「．．．何でしょうね？緊急ニュースって．．．。」

「ほっとけ、新八。どうせ、くだらないニュースだ。．．．大体、最近では．．．．。」

「それでは、ニュースを流します。．．．」

．．．画面が新しいニュース画面に切り替わったと同時に新八の顔色が急変した。

「．．．ぎ、銀さん、くだらないニュースじゃないみたいですよ．．．これ」

「ええ？違うの？くだらないニュースじゃねえの？若者のニュースだ．．．ろ．．．」

銀時の顔色もサーッと青ざめていく。

万事屋は、さつきまで騒がしかった部屋が一気に静まりかえった。

「．．．銀さん、これ．．．。どういうことです．．．か？」

「分かんねえ．．．。ただ、大きな事件に巻き込まれそうだな．．．」

「

太陽がギンギンと照りつける夏。

少しずつ、少しずつ・・・江戸の町に闇が襲ってきた・・・。

< 続く >

夏の猛暑。
(後書き)

はい。

次回から本番ですね。

よかったら見て下さいねー^^

入口。（前書き）

第2話です。

初めて読む方は第1話から読んだ方がよろしいかと・・・^^↑

途中、脱文もあると思いますが

よければ最後までお付き合いくださいませ・・・

入口。

最悪ネ．．．。

こんな暑苦しい中、こんな暑苦しい奴にあつて、もっと暑苦しくなつたアル！

．．．それにしても相変わらずアルな。
いつに増して暑苦しい格好ネ．．．。

神楽の目の前には、沖田総悟。

真選組 一番隊 隊長だ。

いつもなら、ここでケンカになるはずの二人だが、
今日は何故か、沖田の様子がおかしい。

「．．．おい、サド。暑苦しい格好で私の目の前に現れるんじゃないネ。」

暑苦しいアル！そこをどきな。」

「．．．．．」

「．．．．．」

「．．．．．」

「．．．．．おい、お前聞いているアルか？そこをどけって言ってるネ。」

「．．．．．」

「．．．．．だーからー、そこをど．．．」

「お前、夜兎族だったよな？大丈夫なのかイ？．．．こんな所に居て。」

「．．．．．は？何心配してるネ？私は夜兎だけど丈夫にできてるアル。ちよつとやさつとの

日差しじゃくたばらないネ。」

「．．．．．そうじゃないでさア。星に帰んなくて大丈夫なのかつて

聞いてるんでイ。」

「．．．は？私が星に帰る？．．．そんなことはないはアル」

「そうか、まだ知らないのかイ。まあいい、俺も旦那に用事があるんでさア。」

．．．？

何？どうしたアルか？こいつ．．．。

私が星に帰るとか．．．。

そんなの有り得ないネ！

遂にこいつも、頭がパンクしたアル．．．。

沖田は万事屋に行く途中、一言も喋らなかった。

ただ、今日一番てっぺんにある太陽がひたすら二人を照りつけている。

神楽はいつもと違って静かな沖田を、腹立たしく思うも、心では不安でいっぱいだった。

「．．．．？」

ガラガラガラ

「銀ちゃあん。帰ったアルヨー！ついでにサドも一緒ネ。」

神楽は大声で言ってみるも、返事がない。

万事屋は静まりかえっていた。

「．．．銀ちゃーん？新八一？いるなら返事するアルヨー。」

ガサツ

奥の方で何やら物音がした。

「．．．ああ、神楽ちゃん。おかえり」

「あつ、新八！出るの遅いネ！」

「．．．ご、ごめん。ごめん。」

「．．．や、別に．．．？」

どうやら、新八はいつもと様子が違う。
顔が青い。

何アルか？

今日、皆ヘンネ！

様子がおかしい。

サドも沖田も！！

何か事件アルか？

．．．まあ、どうせくだらない事件ネ。

私は関係ない。

神楽はそんな能天気なことを考えながら、酢昆布をかじっていた。

「．．．おお、神楽。帰ってたのか。」

「．．．銀ちゃん．．．。」

「．．．．．」

「．．．．．」

「．．．．．」

「．．．か、神楽ちゃん。大丈夫だからね！沖田さんもいるし、僕たちがついてるから！」

「そ、そうだぜ。神楽。あんなニユース気にすんな！お前は関係ねえから！」

「．．．え？なんのこと．．．」

「だーから、大丈夫！！」

「．．．旦那、こいつまだあのこと知んねえでさア。どうやら、耳に入ってこなかったらしいですぜイ。」

「．．．？」

あのこと？

何アルか？？

なんだか、慌ただしネ。

でも、私には関係ないアル！！絶対に！！
大丈夫アル！！

．．．神楽はそう思う反面、さっきよりも不安が一気に込み上げてきた。

なんだか、悪い予感がする。そう思っていた。

銀時、新八の焦った顔。サドの強張っている様子。

神楽は、不安でいっぱいだった。

．．．きつと、大丈夫アル。

「．．．何アルか？あのことつて。」

「．．．神楽ちゃん。知らなかったんだ。」

「神楽、聞いても後悔するなよ．．．。」

「．．．やだなあ、銀ちゃん。後悔なんて．．．」

「そうだな。なら話すか．．．。」

―― 実は．．．――

話を聞いたとたん、神楽の顔が真っ青になった。

冷や汗が出て、肩が小さく震えている。

さっきまでのあの笑顔は、跡形もなく消えていた。

．．．え？

．．．．．そんなハズは．．．。

．．．そんなハズはないアル．．．。

．．．あいつ等がそんなことする訳ないネ．．．。

．．．．．な．．．．．んで．．．？

．．．．．なんで．．．。

．．．．．なんで？！

あんなこと．．．．．する訳が．．．．．。

江戸の町は、今500個の爆弾を仕掛けられている・・・。
それを仕掛けたのは・・・。

「．．．神楽．．．。」

「．．．なん．．．で？．．．なんで？！．．．そんな．．．嫌．．．嫌アル！！」

「．．．神楽ちゃん．．．。」

「そんな！！そんなの！！ひどい．．．ネ．．．。」

「ガラッ、バタン」

気づいたら神楽は走っていた。

頭の中は真っ白で、行き先もなくただただ、走った。

さっきまで、てっぺんにいた太陽も、沈みかけている。

「．．．．．はっ．．．はあ．．．はあ」

あー、もう何やってるアルか。私は。

こんなところで、飛び出したりして。

そんなんじゃ、弱さ丸出しネ．．．。

私をもっと強くならないと駄目なのに．．．。

私が．．私がもっと．．。
強くないと．．。

夕暮れが近付いている空の下、神楽は思いっきり泣いた。
何回も、何回も銀時の言った言葉が脳裏を流れる。

の族だ。

•
•
•

爆弾を仕掛けた奴らは、それは、夜兔族。

星に返すのが条件・・・。
| ・・・爆弾を阻止するためには・・・地球にいる夜兎族、神楽を、

「うわぁぁぁぁ。」

・
・
・
だから、俺達と神楽は
・
・
・
|

声をあげて、泣く神楽。

そんな神楽を遠くの方で、沖田はそつと見守っていた。

「……だから、俺達とお前は……もう……」

「
・
・
・
う
く
」

――別れの時かもしれない――

入口（後書き）

はい。

だんだん盛り上がって来ました^^ノ

「宣戦」まだまだ続きます。

下手ですが、読んでやってください
↑

満月。（前書き）

3話目ですね。

1、2話目は、なんかとても読みにくくなっていたので、今回は読みやすくするのが目標です・・・＾＾；

ちなみに、「宣戦」は神楽が夜兎族の本能を発揮する所を書きたくて作った話です。

3話目は沖田の出番が多いですね。

では本編スタート←

満月。

―俺達と神楽は．．．別れの時かもしれない．．．。

旦那がそう言うってから、3時間。

チャイナは丸3時間、ずっと泣いている。

俺が、こいつの泣いている所を見るのは何回かあったが、こんなに声をあげて泣く所を見たのは初めてだ。

いつも、強がっているチャイナしか見ていない俺にとって、今のチャイナの姿を見るのは新鮮だった。

．．．こいつも女なんだな．．．

ふと、そんな言葉が、脳裏を過る。

考えてみれば、こいつも女だ。

弱い所があつて当たり前。

まわりは、オレンジ色にそまり、
ドラマのワンシーンのようにとても美しく、

夕日が、チャイナを照らして、一粒、一粒の涙が宝石のように光って見える。

その光景は、あまりにも美しく、夢かった。

「・・・・つく・・。」

思わず、頬に一筋の涙が落ちる。

「・・・・悲しい」

素直にそう思った。
いつのまにか、こいつは、俺にとって”特別な存在”になっていた
のかもしれない。
喜怒哀楽、全部の感情を埋めてくれた。

．．だから．．だから、もう充分。
．．俺の前で、無理した姿を見せるな。

気づけば俺は、こいつに沢山のものを貰っていた。
感謝とか、そういうのじゃ、伝えきれない。
「ありがとう」そんな言葉では伝えきれない。

侍は、体を張って伝える。
侍は、体を張って礼をする。

「．．．．．めろ。．．．やめろ。．．．もう、泣くな。」

とても聞こえないような声で、呟いた。

．．．でも、どうやらチャイナには聞こえていたらしい。
小さい華奢な体が、ピクリと反応する。

「．．．．．もう、俺の前で泣くんじゃないでさア。」

そう言うと、オレンジと桃色が混ざったような色の頭が、そつと顔を上げた。

「．．．．．は？．．．サド？」

「おい、チャイナ。探したぜイ？」

「．．．．．お前、いつからここにいたアルか？！」

「ついさっき。」

「・・・まじアルか?!全然気付かなかったネ!」

チャイナは、驚いたようすで笑うと、立ち上がり服についた土を掃う。

そして、俺の方へ歩いてきた。

「さっ、帰るアルヨ。銀ちゃんが心配してるネ!」

無理したような笑顔を俺の方へ向けると、万事屋の方へ歩きだした。

・・・ほら、まただ。

・・・また、無理した作り笑いをする。

・・・また、弱音を吐かずに、自分だけで抱え込んでいる。

万事屋の方へ、歩いていく小さな背中は、誰よりも逞しく強い背中だ。

俺は、その小さな背中を守りたいと思った。

誰よりも先に、その背中を守りたかった。

「．．．チャイナ。待ちなせイ。」

「．．．ん？何アルか？」

「俺も、お前の作ったクソ晩飯、食べに行きまさら。」

チャイナは怒った顔で傘を、振り回してきた。

「おい、サド！クソ晩飯とは何ネ！酷いアル！」

「．．．別に、事実を言っただけでさア。」

「なんだと？！このサド野郎が！覚悟するネ！」

「．．．だから、事実を言っただって言ってるだろイ？大人しく、認めなせイ。」

二人は肩を並べて、いつものように喧嘩しながら帰っていった。

backには、大きな夏の夕焼け。

二人を見送るかのように、沈んでいく。

やがて、銀色に輝く、満月が二人を照らす。

「．．．侍は体を張って、守りたいもんを守り抜く。」

沖田は、満月に向かって、そう呟いた。

光り輝く満月が、静かな夜を装う。

誰もが見とれる、その美しい輝きの裏には、何があるのだろうか。
輝けば輝くほど、危険な香り。

何の曇りもない晴れた満月は、まるで何かを予言しているようだ。

「あー．．．。綺麗な満月だ．．．。明日は、雨だな．．．。」

銀時は、満月の夜に、一見笑うも、悲しそくに呟いた。

今晚は、美しく光り輝く満月」。

満月。（後書き）

3 話目、終わりです^^

なかなか、夜兔族は姿を現しませんね。

今回は沖田目線で行きました。

最後にちよつこと銀さん（笑）

4 話～5 話くらいに、夜兔族出す予定です。

では^^^

3 話目、読んで下さってありがとうございます。

4 話目につづきまーす！

蝶のような蜘蛛。 (前書き)

4 話目です。

今回はちよこつと銀さん目線で (笑)。

本編スタート ←

蝶のような蜘蛛。

― チュンチュンチュン ―

小鳥達が囀り、やがて朝が来た。

昨日と変わらず江戸の町は賑やかだ。

朝だと言うのに、昼間のような混み具合。

イチャつくカップルもいれば、家族団欒で歩いている人もいる。

「・・・あれね。今日は雨だと思ったのになあ。ピーカン晴れじゃねえか。」

― ガラガラガラ ―

「あ、新八か。今日も朝早いねえ。おはようさん。」

「銀さん。おはようございます。神樂ちゃんの方はどうですか。」

「・・・あーん？神樂？昨日と一変もしねえよ。」

「そうですか。」

二人の視線が神樂に向けられた。

神樂は、昨日と一変も変わらず、作り笑い。
疲れ切った体はいつになく、色白く見える。

「おう。新八。来たアルか。」

「おはよう。神樂ちゃん。」

いつもなら、微笑ましいはずの二人だが
今日は、少し引きつっている。

あー。青春ですか、コノヤロー。

なんだこの、微笑ましいような、引きつってるような空気は！
やっぱり、あの事件か？あの事件なのか？！

．．．まあ、無理もねえけどな。

突然別れるなんて、な。

．．．．．

．．．．．

．．

．．．．。別れる？

いや、それはないか。

何れ、神楽は夜兎には渡さねえ。

絶対。

「さーてと、行きますか？青春野郎共！」

銀時は、木刀を手に持ち、玄関を開けた。

「は？銀さん？行くってどこに？？つか、青春野郎って何？！」

「あほう。江戸と神楽を守りにだよ。早く行かねえと爆弾が爆発しちまうからな。」

「．．．銀ちゃん。」

銀時は神楽につこり笑いかけると、玄関を出た。

あとの二人も、追って玄関を出る。

一気に差し込んでくる夏の日差しが、3人を照りつける。

雲一つない、青空はまるで何事もないかのように爽やかだ。

時々、吹く夏風が心地よい。

たつく、今日はぜってー雨だったと思ったのになあ。
なんかそんな気がしたんだけどな。

．．．気のせいかな？

．．．いや、銀さんのお天気予報だ。

気のせいのはずはねえ。

きつと今から降るだろ。

「あー、暑いアル。蕩けるアル。絶対死ぬネ！夜兎には毒アルヨ。」

「．．．確かに、暑いですね。太陽がギツラギラじゃないですか。」

「うむ。確かにそうだな。この、んまい棒に誓って。」

．．．．．

そこには銀時ではなく、でも沖田でもない、侍が立っていた。

「か、桂さん？！いつのまに居たんですか？？！」

「おい、ツラ。何万事屋メンバーみたいな顔してるんだよ！」

「ツラじゃない桂だ。リーダーと江戸の危機が襲いかかってるって聞いてな。」

飛びついて来たのだ。」

「ツラ．．．．。お前。実は良い奴だったんだな。」

「ツラじゃない桂だ。リーダーの危機は俺の危機！！」

そつ言う桂の隣では、暑そうにアイスを舐めているエリザベスがいる。

．．．おいおいおい。またやっかいな奴が、出てきたじゃねえか。
何が、「リーダーの危機は俺の危機！」だ。

どうせ、天人目当てだろ。

四人の額から、汗が滲み出る。

今にもとろけそうな、この暑さは、より四人を圧迫させた。きっと誰もが思っていたことだろう。

― 必ず、江戸と神楽は守る。―

「．．．さてと、そろそろ．．．。」

「そうですねイ。俺も待ちくたびれましたぜイ。旦那。」

そんな沖田の登場に、一番反応したのは神楽だった。

「あ、サド。何良い所で入ってるネ?! お前に守られるなんてごめんヨ!」

「うるさいねイ。お前守るなんていつ言った? 生憎、お前を守る剣なんて持ち合わせてねえんだよ。」

「あーそうアルか。なら、いちいち登場すんな。」

「うつせえ。馬鹿が。」

「あー?! 今なんつった?! もう一回言うヨロシ!」

「あー、もう。うつせえよ。神楽も総一郎くんも!」

「旦那。総悟です。」

「取りあえず、爆弾を取り外しから始めッぞ。」

「えー?! 銀さん何言ってるんですか?! 無理ですよ。500個なんて。」

ただでさえ、江戸は広いのに！」

「銀時。無茶言うな。そんなの無理……。」

「四の五の言わず、やれ！今やれることはそんなくらいだ。」

銀時のその言葉に返す言葉が無くなった三人は、
言うつ通りに爆弾を探す。

沖田、神楽は北。

桂、エリザベスは南。

銀時、新八は西と東だ

それぞれ、別の方向に探しに行った。

気温はきつと、40度を達しているはずだ。

さっきまで、仲良く囀り合っていた小鳥達もだんだんと、巢に帰っている。

ピークに達した頃にはもう、汗が絞っても出ない程噴き出しているだろう。

太陽がギンギン照りつける中、黙々と爆弾を外すが、500個どころか、50個も取れていない。

「あーもう、無理ですよ。銀さん。500個なんて、無茶です。」

「うるせえ。探せ。江戸と神楽がどうなってもいいのか?!」

「良くないですけど、もっとほかの手段ないんですか?!」

「ない。」

「...あー、やっぱり無理なのか。
500個なんて...」。

でもな！。

他の手段つたて、何がある？

夜兎に直接頼んだって、絶対無理だろ。

俺達、全員死ぬよな。

かと言って、爆弾を500個も・・・。

「・・・あー、もう！！」

あっちから動いてくんねえのかよ！！

そんなことを思う銀時の後ろには、監視カメラがキラッと、反射していた。

まるで、江戸の人達を鋭く監視しているかのよう。

「・・・っ・・・疲れたアル・・・。段々、雲行きが怪しくなってきたネ・・・。」

。。

「いやあ。上手くやったね。団長。」

コンピューターの音がカチカチと鳴る暗闇の中、
一人の男がそう吐いた。
点々と光る画面には、江戸の町が映っている。

「ああ、本当にね。簡単に引つかかるなんて。」

「．．．そういや、団長さんよお。あの娘．．．」

「ああ。神楽？」

「そうそう。上手くこつちに連れ戻せるのかい？」

「．．．そんな簡単さ。あいつを連れ戻すんだよ。絶対にね。」

もう一人の男はクスクスと闇の中で不気味に笑った。

まるでその姿は、何でも見通しているような姿だった。

「ははっ。すごい自信だなあ？団長さんよお。」

「まあね。絶対、連れ戻して来るんだよ。」

「さすがだな。団長。」

もう一度笑ったその男の肩には、

どこから迷いこんだのか．．．一匹の蝶が止まった。

――グシャ――

男は、蝶を手にとめたかと思うと、次の瞬間には、

蝶は無残な姿となって床に落ちた。

床に落ちた蝶を踏んで、跡形もない姿にすると羽だけを拾ってフツと飛ばした。

まるでその男の姿は、蝶のように美しく、蜘蛛のように恐ろしい。

一見、美しくも、じりじりと相手を締め付ける。

その男の恐ろしさを物語っていた。

「．．．ははっ。冗談やめてよ。」

「いや本当だぜ？団長さん．．．」

「
・
・
・
・
い
や、
神
威
・
・
」

蝶のような蜘蛛。（後書き）

最後まで読んで下さって有難うございます。

ついに夜兎登場^^ノ

やっと、盛り上がってきましたね。

今回は、結構サブタイ悩んだんです・・・。

最初は、「闇」とか「雲行き」みたいなのを考えていたんですが、神威登場の所で、蝶と蜘蛛が出てきたので「蝶のような蜘蛛」にしました。

つか、このサブタイどーよ？（爆）

では、次話に続きます。

嵐。

正午。

じりじりと太陽が江戸の町を照りつける。

夏の日差しが神楽の額を直撃する。

「．．．あー、もう。暑いアル！夜兎にはキツイヨ。」

「さつきから五月蠅い。集中出来ないだろイ。」

「お前、集中もなにもさつきから、何もしてないネ！働け。」

「ああ？生憎この事件。俺には、ほぼ関係ないことだぜイ。」

こいつ．．．。本当ム力つくアル。

こっちは必死にやってるってんのに。

沖田は、いつもと変わらず無表情で答えた。

額には汗が次々と流れる。

「おい、江戸がどうなってもいいアルか？」

「．．．関係ないねイ。俺ア、故郷はもつと遠い所なんで。」

「私だつて古郷は違う星ネ。」

「．．．でも、てめえはこの事件の最大の力ギだろイ。」

「だから、こうやって必死にやってるんだヨ！」

「．．．。大体、お前ら夜兎がさつさと星に帰ればいい話じゃね

えかイ。
「．．．。」

確かに、私たち夜兔が帰れば、すぐ終わる話。
皆にも辛い思いさせずに済む。

．．．このまま帰った方が良いアルか？
．．．本当にそれで良いアルか？

ざわざわと五月蠅い江戸の町の音が、一気に耳から離れていく。
神楽の視界が次第に真っ暗になっていく。
全身から鳥肌が立つ。

「私が．．．星に帰れば．．．助かる」

．．．本当に？
．．．本当に助かる？

「．．．本当．．．アルか？」
「あ？」

「．．．本当にそう思っているだけアルか?!」

「どうかしたかい?突然．．．」

「私が、星に帰ればいいと思ってるアルか?!」

「．．．?!ああ?当たり前だろうイ。お前が星に帰れば、ただ事は終わるんでイ。」

「．．．そう、か．．。分かったネ．．じゃあ、」

「星に．．．私は、星に．．．帰．．る．．ヨ。」

・
・
・
・
そう
・
・
ネ。

この星の人じゃなかった．．．。
．．．私は所詮夜兎だったネ．．．。

血に生きて、血に戦う夜兎族。

私の戦場はこんなところじゃないアル。

私は、夜兎族．．．．ここは地球。

私の居場所じゃない。

―私は、必要な．．．い。―

「・・・らあああ！！！！」

私の中で何かが騒いだ。
今までになかった感情。
体が暑くなる。

・・・これは何？

「お前は、夜兔族。」

「・・・チャイナ?!」

「・・・私は、所詮、夜兎族だああ!!」
「・・・あ、危な!」

「ドスッ・・・」

この騒いでいるものは何・・・？

||

— さあ ああ あ —

「 . . . お、雨か。やっぱり天気予報あたってたな。」

雲行きが怪しくなり、たちまち雨が降りだした。
それが嵐になり、一瞬で江戸の町を巻き込んだ。

雨も風も雷も、何もかもが何かの嵐を呼んでいる。
それは、とてつもなく大きく、恐ろしい。
江戸の町に闇の影が迫っている。

夏の嵐は、
怖い。

<
>

<
続

嵐。
(後書き)

展開早つ。
↑

血（前書き）

えー、遅くなつてしまいすいません・・。

ネタがなかなか思いつかずorz

そんでもって、ほかのサイトをブラブラしました。えへ（殴
そんじゃ、本編どーぞ。

血

—ざあああ—

ドスッブスッドスッ

嵐の中に、何回も何回も鈍い音になる。

だんだん、エスカレートしていく音。

なにかの、オーラが出ている神楽の体は、言うまでもない。
夜兎の血が騒ぎだした証だ。

「．．．や．．．。やめ．．。チャイ．．ナ．．。」

「五月蠅いアル！この田舎もんが。思い知れ！！」

「．．．おい．．．。やめ．．。」

私の中で、何かが騒ぐ。

それはとてつもなく熱い。

．．．夜兎。

そう、血に生きて。血に戦う。
夜兎の血。夜兎の本能。

やばい。止められない。

血が．．．血が．．．体が止まらない。

「ツらああああ!!」

「．．．チャ．．．チャイ．．．」

―バキッ―

「．．．チャイ．．．ナ．．．。やめ．．．。折れ．．．」

「黙りな。」

「チャイ．．．ナ．．．。やめろ．．．死．．．ぬ」

「黙れ。」

沖田が必死でもがくが、神楽は顔色をひとつも変えない。
むしろ、楽しんでいるようだ。
さつきとはまるで別人。

「やめ．．．ろ．．．。やめ．．．。」

「黙れつつてるネ!! うっせーんだよ。さつきから。」

「チャイ．．．ナ。お前．．．今．．．」

「なんだ? なんか文句あるアルか?」

「お前．．．今．．．なにしてるか分かってんのか．．．」

「は??」

「お前．．．今まで必死にこらえてたじゃねえかい」

「．．．．．五月蠅い。こちとら、こっちの腐った連中じゃないネ。

いつまでも、この血を抑えられるとでも思ってたのか?!．．．」

「チャイ．．．」

「．．．これ以上苦しめないでヨ。こっちはためーの血抑えるので
いっぱいいっぱい．．．。

本当はこんなことやりたくないアル。でも．．．」

神楽は右腕を高く振り上げた。

涙をたくさん溜めた顔で。

沖田を力いっぱい殴りる体制に入っている。

今にも神楽の手が沖田の顔面を目掛けて、落として来そうだ。

「ぼた」

沖田の顔に1滴、涙が落ちてきた。

「チャイ．．．」

「ドスッ．．．」

周りの人たちも、二人を見てざわついている。

「何？けんか？？町中で・・・」

「ちよつと、あの子大丈夫？血だらだら」

そんな人ごみをかき分け、銀髪の男がやってきた。

「おい。神楽、何やってんだ。」

「・・・。」

「おい。喋れ。」

「・・・。」

「・・・おい！！喋れって・・・」

「旦那」

銀時の言葉は顔面が、血だらけの沖田によってふさがれた。

「総一郎・・・くん。」

「旦那。そつとしてやってくだせイ。」

「つて、大丈夫かお前。血がだらだら」

「こいつぁ、ちと暴れすぎたかねイ。俺も、いつもなら止めてたんだが、今日は止めれなかった。なんでだと思えますかイ？」

「・・・。」

「フン。面倒なこつたぁ、こいつの受け継ぎ持った血ってのが、騒ぎ出したんでさア。」

「・・・受け継ぎ持った??」

「・・・そう、所謂、夜兎の血ってやつでさア。」

「夜兎の血?!」

銀時の顔色がだんだんと青ざめていく。

「夜兎の血?! やばいじゃないんですか? 銀さん!!」

「... 確かに。こいつア、やばい。」

町の人たちは危険を察知したのか、皆家へと帰っていく。
雨もだんだんと強まる。

風、雨、雷、それが合わさってできる嵐。
今まさにその状態だ。

やめてヨ。皆揃って夜兎、夜兎。
そんなに、夜兎がやばいアルか?
そんなに、夜兎は危険アルか?

そんなに...、皆に迷惑掛けてるアルか?

「... やだヨ...。」

「神楽?!」

「... やだヨ。私、此处から離れたくないヨ。」

「...。」

「やだヨ...。やだヨ!」

「・・・。」

町にはもう、誰ひとりいない。

銀時と新八と沖田。

そして神楽だけだ。

さっきまで、一緒にいた桂も、いつのまにか、いなくなっていた。

重い沈黙が続くなか、最初に口を割ったのは意外にも沖田だった。

「大丈夫でさア。おめえは、まだ此処から離れられねえよ。まだ俺との決着がついてねえンデイ。」

故郷に帰らせるなんざ、させねえ。」

「・・・沖田さん。」

「そうだ。神楽。お前には、仲間っつーもんがあるんだ。そう簡単にあっち行きにはさせねえーよ」

「・・・銀さん。・・・そうですよね。神楽ちゃん心配いらないよ。」

神楽の頬に一筋の涙が、流れた。

「・・・私、ここに居ていいアルか？本当にいいアルか？」

「あたりまえだよ。僕たち、仲間じゃないか」

「まあ、こんな所でもいいならな。」

「本当にいいアルか？？本当に？！」

神楽意外の3人は小さく笑った。
いいよ。ここにいてもいいよ。そう伝わったのだろうか。
神楽の涙もなくなっていった。

「ま、俺ア、勝負さえつきやア、いいんだがねイ。」

「んだと、っらアアアア！！さっき、もっとやっつくんだったア！
！」

「おーい。いい感じの所でけんかか？！お前ら空気読めやア」
「まあ、いいんじゃないですか。銀さ・・・。」

――ブツ――

「あれ。停電??」

「おかしいですねイ。さっき点検したばかりですぜイ？」
「嵐のせいじゃねえか？」

――ざッ――

「え？」

銀時たちの見上げるさきには、透き通った肌、神楽と似たような傘。ピンクとオレンジが混ざったような髪色。につこり笑う笑顔とは裏腹に、黒いオーラを雇った体。まるで、さっきの神楽のようだ。

「お前……！！なんでここに！」

— ギアアアアア —

また嵐はひどくなって行く。

沖田から、流れた血が道に落ち、赤黒く染まっていく。

「こんにちは。元気だねー。此処の人たちは」

< じゅくく >

血（後書き）

では、次回。

灰色の男（前書き）

お久しぶりです。

お気に入り登録して頂いているにも関わらず、
サボっていませんでした。

では、久しぶりの更新です。

本編へどうぞ
←

灰色の男

「元気だね。此処の人たちは。」

神楽と同じ透き通るような肌、ピンクとオレンジを混ぜたような髪色。

そして夏にも関わらず、真っ黒のロングコートを着た男。

「．．．．おっ．．．お前は．．．！！！！」

「．．．えっ。誰ですかイ。旦那。」

「あつれー。誰かと思えば．．君は．．えっと」

「．．．団長。あれですよ。高杉を追いかけてる．．．」

「あー。はいはい。真選組一番隊の隊長。

高杉の奴らと派手にやったらしいねえ。

しかも、仲間倒されたんだって？？かわいそうに。」

「．．．お前！！なんでそれを！！」

頭にきた沖田は、自慢の剣を大きく振った。

しかし、そんな攻撃はヒラリとかわされる。

「おい！やめとけ！！」

「そうですよ！！そんな無茶振りききません！！」

「．．．じゃあ、一体奴は誰なんでイ．．．。」

「．．．奴はな．．．」

しかし、銀時の言葉は神楽によって塞がれてしまった。

「．．．神威いいいい！！」

「ドコッ」

神楽は大きく傘を振り回すが、そんな攻撃もヒラリとかわされてしまった。

「お前！！なんでここにいるアルか？！！」

「おおつ。お前さんは、あの時の！！」

「よせ、阿武兔。」

「そんな雑魚がまう必要はない。」

「でも．．．」

「．．．いいんだ。かまうな」

「団長．．．」

「グッシャ」

彼の一発で硬く固められたコンクリートの壁も、すぐ崩れてしまった。

壁だけならいいもの．．．

壁めがけて振られた傘は団員の肩も壊させた。

「．．．いった。団長．．．。何も俺の肩まで壊すことないだろう。」

」

「ごめんごめん。つい．．．。後で治療したげるよ。」

「ったく、こまるぜ。仲間まで傷つけるんだもんなあ。」

「あはは。本当にねー。」

彼らは灰色のオーラをまとい、何事もなかったように去っていく。

その姿を銀時たちはただ、眺めるだけだった。

いつもは追いかけるが、今日は何を察知したのだろうか。
追いかけるどころか、立ち上がる気配もない。

その中でもただ一人の少女は、悔しそうに下唇を噛む。

「．．．くっそ．．．。」

何か不吉な予感がするのは．．．言うまでもない。

>>つづく<<

灰色の男（後書き）

サブタイって悩みますね。

次回もよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0067k/>

宣戦

2010年11月16日10時50分発行